

観光文化

Tourism & Culture



財団法人日本交通公社

特集◎ 自転車と地域振興

◆巻頭言

自転車の旅の素晴らしさ 白鳥 和也……①

◆特集

- 観光における自転車の可能性について考える 小林 成基……②
- 自転車で「走れば愉快だ宇都宮」
—自転車のまち宇都宮を目指して 小川 恵太……⑥
- 世界に誇るサイクリングコースしまなみの展望
—住民参画の自転車まちづくり 山本 優子……⑩
- 『旅チャリ』で町に優しく、「旅」は楽しく
—JTB48と『旅チャリ』と 高知尾 昌行……⑭

◆視点

- イベント継続の意義と秘訣
—「天領^{ひた}日田おひなまつり」はなぜ二十八年間も続いているのか 朝倉 はるみ……⑲

◆連載

I あの町この町 第42回

牧之通り誕生記—新潟県南魚沼市塩沢 池内 紀……⑳

II ホスピタリティーの手触り 63

ラグジュアリーであれ、ニッポン 山口 由美……㉓

◆新着図書紹介……㉔



室戸・吉良川

私が取材に訪れた日、群青の空と雄大なスケールで広がる太平洋がまぶしく輝いていた。

室戸市吉良川宿は、江戸時代に高知から室戸に至る浜街道沿いに形成された町である。明治時代に木炭の生産が始まり、大正時代は備長炭の名産地となり炭は舟で京阪神へ運ばれ、帰りの便では日用雑貨を積み帰り、回船の交易で吉良川に繁栄をもたらしたという。町並みの形成には、こうした背景がある。

海側の下町地区と山側の上町地区から成る町並みは、当時のままの面影を色濃く今に伝える。切妻造りの家、蔵、いしぐろ(石垣塀)などの歴史的景観が実に美しい。国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されたのは一九九七年。太平洋からの強い風雨にさらされる自然環境から家屋を守るのは当然で、土佐漆喰と水切りと呼ばれる雨仕舞いのための工法が独自の美を醸し出している。漆喰の白壁の連なる町並みが見事に調和して歴史的建造物を浮き立たせ、心地よい映像を創り上げた。

(写真・文 樋口健一)

シクロツーリズムという言葉で国際的に通用する余暇活動、すなわち自転車の旅に対する関心が、ここ数年でかなり高まってきている。二〇〇〇年頃以降のわが国の自転車ブームは、都市部の日常使用での快適さの発見、高性能な本格的スポーツサイクルの普及というような段階を経て、ようやく、旅という、より空間的にも時間的にも拡大された運用法が浸透し始めてきていると言っていいたいだろう。

自転車の旅は、単に、ほかの交通機関の置き換えとして、自転車の利便性を利用していただけではない。自らの身体を使って移動してゆくこと自体に、この道楽ならではのようこびが見つかると。同じところを訪れても、自分の身体や五官を使ってそこに辿り着くと、感動はずっと大きくなる。大量消費型の観光行動とは少々異なり、観光スポットという点を拾い集めてゆくことが重要なわけではない。

自転車の旅人にとっては、その行程の途中で出会うあらゆるものが、記憶に値するものとなる。地元の人しか通らないような、名もない旧道。時間をかけて上った、長い長い坂。自転車を立てかけて、その傍らで休んだ石垣。

そうしたものがすべてが、かけがえのない旅の記憶となる。自転車の旅は、線の旅であり、この国の、地域地域における風土や文化の違いに驚き、普通の人々の暮らしがりのなかに、何か注目し値するものを見いだす。腹もよく減るので、贅沢ぜいたくな料理でなくても「地元」のあれやこれやがおいしい。

自転車の旅の素晴らしさ

自転車文学研究室主宰／小説家・エッセイスト

白鳥 和也

一日走って宿に辿り着くことが、どれほどうれしいことか。自転車の旅では、予定通りの到着さえ当たり前ではない。パンクや雨天に対処するだけでなく、時に危険な交通事情や、便利だが面倒でもある輪行りんこう（自転車を軽く分解して袋に入れ、持ち主が携行して鉄道等の公共交通機関に乗ること）作業も自己責任で対応しなければならない。

だから自転車の旅は、大人の遊びでもあるが、その間口は広い。泊まりの旅でなくても、ずいぶんと見聞を広めることができるし、自転車が走りやすいところが遊び場だから、資源は無尽蔵だ。ガイド付きサイクリングも普及しつつある。

欧米では、自転車の旅人はむしろ上客とされる。受け入れ側に求められることもそれほど難しくはない。自転車の旅人特有の要望があるとすれば、皆、高価な自転車を自分の体の一部のように大切にしているから、せめて館内に入れて施設することを許してほしいということぐらいだろう。

前述の「輪行」をはじめとして、制度やシステムの整備、周囲の理解、サイクリストのマナーの徹底等、課題は少なくないけれども、地域文化の繊細な差異や人々との出会いを、全身全霊で体験できることがこの遊びの何よりの面白さだと思う。「観光文化」のようなオピニオンリーダーのメディアが、自転車の旅を取り上げてくださるようになったこと自体に、隔世の感がある。

(しらとり かずや)

自転車と地域振興

ここ数年、自転車の人気が高まり、特に若い女性は、ファッションとして自転車を捉えているともいわれています。各地では観光振興のための重要なツールとして自転車が位置づけられてきています。今号は、「自転車と地域振興」をテーマに、観光における自転車の可能性や地域で進められるレンタサイクルなどのさまざまな取り組みを紹介します。

観光における自転車の可能性について考える

NPO法人自転車活用推進研究会 理事長

小林 成基

世界遺産を自転車で守れるか？

数年前、中央アジアの国・ウズベキスタンの大使にお目にかかる機会を得た。地域の文化や歴史を研究しておられた大学教授の紹介だった。ウズベキスタンには古都・サマルカンドや城塞都市・ヒヴァにあるディチャン・カラ、オアシス都市のブハラなど、^{いにしよ}古のシルクロードの拠点であり、世界遺産に指定されている貴重な文化遺産がある。古代から中世にかけて建設された壮麗な

寺院や市街地は、戦争や革命などでたびたび痛めつけられてきたが、二十年続く長期独裁政権下で平穏が保たれ、ようやく修復が始まった。そして、ウランや天然ガス、原油などエネルギー資源と並んで、歴史的遺構観光が重要な外貨獲得源に成長してきた。

日本からの観光客も増えつつあり、ロシアを除く旧ソ連地域では唯一、日本との定期航空路を持つている国でもある。大使の心配は、世界中から観光客が押し寄せてく

るのはありがたいのだが、観光バスや車の振動や排気ガスで、世界遺産が少しずつ劣化するのではないかと指摘されていることだった。巨大な重機や大型のバスなどが存在しなかった時代の建築物は実に繊細である。奇跡的に長年の風雪に耐えて残ってきたものが、産業革命以降に登場してきたあまりにもパワフルな機械の影響で、壊滅的な被害を受けることが少なくない。観光客の利便のために、空港を造り、道路を整備してアクセスを確保しても、そのことによつ

て観光資源が崩壊したのでは本末転倒である。近視眼的な観光政策は時折、冗談としか思えない計画を立てる。例えば、美しい海と珊瑚礁を売り物にしている観光地で、客の利便を改善するために海を埋め立てて飛行場を造成するというプランが大まじめに提案された事実がある。便利になった飛行場に降り立つ観光客は、いったい何を見ればいいのだろう。ウスベキスタンでも、遺跡などの近くに大規模な駐車場を造ることが検討されたそうだが、現在のところ、まだまだ車は少なく、観光バスも隊列をなしてやってくる状態ではない。今のうちに観光資源から離れた場所で車の襲来を食い止め、排気ガスを出さず振動も少ない交通手段で客を移動させる仕組みを構築しておきたい、と考えるのは当然であり、健全だ。大使は、日本で大量の放置自転車が撤去され、廃棄されていることをテレビで知ったと言う。これらの自転車を援助物資として送ってもらって活用したいのだが、どんな問題があるか、とのご下問であった。

放置された自転車の安全性は？

撤去された自転車は、持ち主が半年間現

れなければ所有権は自治体に移る。協力を呼びかければ提供する自治体はあるだろう。問題は、半年も雨ざらしにされた自転車がまともに稼働するかどうかだ。近年、条例で保管期間を短縮するという知恵のある自治体も出てきたので、程度の良い自転車が手に入るかもしれない。最近の統計では、年間に一千万台以上の自転車が販売されているのに、保有台数の伸びは跛行状態だ。類推すると、ほぼ同数の自転車が毎年廃棄されているという恐るべき「もつたいない」構造が見えてくる。そんなもので人類の宝である世界遺産の保全に貢献できるなら、四の五の言わずに実行すべきだ。が、事はどう簡単ではない。まず、わが国の一般的な軽快車、いわゆるママチャリのなかには、乗り手の生命を預かるだけの安全性を持たないものがある。自転車産業振興協会が二〇〇〇年から十年間にわたって実施した試買テストでは、四万円未満で購入した自転車のほとんどがJIS基準を満たしていなかった。テスト対象は毎年約三十台にすぎないが、十年間もダメなものばかりをたまたま購入し続けたとは考えにくい。調査結果はメーカーや輸入代理店などにフィード

バックされ、改善が求められる仕組みになつていたが、残念なことに〇九年にこの意義ある調査は打ち切られた。自治体の中には、撤去自転車の程度の良いものを選んでレンタル自転車として再利用しているところが少なくないが、見た目では安全性はわからない。そんなものを援助物資とするのは外交上いささかためらわれる。また、観光客が、使い古され、あまりかっこいいとはいえないデザインの利用して利用してくるかどうかという懸念もある。フランスのパリ市で二〇〇七年夏に導入されたコミュニティ・バイク「ヴェリブ」などでは特製デザインの自転車が使われており、中古自転車の使い回しが成功している例は日本以外では少ない。観光シーンの自転車活用として注目を浴びているJTBの「旅チャリ」でも、常にこぎれいでちょっとかっこいいモデルが採用されることで、非日常を楽しむという観光客の好評を得ている。もつと根源的な課題は、どのくらいの観光客が自転車に乗れるか、である。日本人は、自転車は誰でも乗れるものと勘違いしているが、多くの国では自転車を運転できない人が何割かいるのが普通だ。特に成熟した車

社会で育った人たちは、子供のころ、パランスをとりつつペダルをこぐ訓練の機会を逸している。例えば韓国・ソウルの漢江沿岸の自転車道には、大人用の練習用補助輪付き自転車の貸し出し拠点がいくつかある。つまり、世界中からやってくる観光客のなかには自転車の運転ができない人が少なからず存在すると考えなければならない。さらに、旅行者の多く、特に観光地が歓迎したい「お金を使ってくれる」客は高齢層であり、ふらつく自転車に乗って汗をかきくよりは、バスやタクシーを選ぶ傾向がある。これらの要素を勘案すると、観光地で提供すべき省エネ・環境配慮型移動手段の姿が見えてくる。私が大使に提案したのは、三輪または四輪で転ぶことがなく、荷物も積めて、複数の客が乗ってゆつたりと走ることができる変形自転車の導入である。山坂がある観光地でも、これに電動アシスト機能を加えれば鬼に金棒であろう。世界遺産が崩落の危機に瀕する前に知恵を絞るのが、今を生きる私たちの責務だ。

配慮せずに自転車観光を勧めないで！

レンタル自転車がうまく使われている都

市として有名なのは香川県高松市である。約一千台もの自転車が、毎日借り出され、市内七カ所のサイクルポートのどこにでも返却できる。高校生や勤め人が主な利用者だが、仕事でやってくる会社員から、讃岐うどんツアーの観光客まで多様な使い方がされている。香川県は「サイクルタウン香川」を標榜し、自転車の利用に熱心だ。観光も自転車で、とサイクルトレインを走らせたり、高松城や栗林公園などには自転車置き場も整備されている。自転車利用を推進する都市でありながら、観光拠点に駐輪場を整備していないところが多いなかで、高松はしつかり目配りができていてうれしい。だが、自転車で出かけてみて愕然としたのは、愛車を駐めて観光しようという気にならないことだった。栗林公園の駐輪場は木製で屋根がついており、ラックはないが空いていれば柱に愛車を縛り付けて置くことができる。高松城のそれは単に砂利敷きのスペースがあるだけだ。ここに自転車を駐めて観光している間に、盗難やいたずらをさせられないかと考えるととてものんびりしてはられない。滞在時間が短ければ、お金を使う機会も減る。安心して愛車を駐められ

る環境があるかどうかは、自転車利用者が増えつつあるなかで重要な視点になるだろう。ごく少数だろうが、はるばる数百キロを旅してくる自転車ツーリストもいる。彼らが使う自転車は数十万円もする高価なものだが、身体になじんだ愛車は何物にも替えがたい。自走してくるにせよ、車や列車で運んでくるにせよ、旅先でいたずらされたり盗まれたりすれば、旅そのものがぶち壊しである。健康にも環境にも良い！と自転車利用を勧めるなら、安全な道路と安心して駐められる駐輪場が必須である。日本の観光地でこの配慮が行き届いているところに、私はまだお目にかかったことがない。沖縄の首里城には大規模な地下駐車場がある。「旅チャリ」に電動アシスト自転車が採用され、急坂を苦もなく上りきることができるようになったが、行ってみると自転車を駐めるところがない。亜熱帯地方の山の上に自転車で行ってくる客など想定外なのだろうが、不思議なことに自転車乗りは坂が好きである。富士山の五合目までをひたすら登るレースや乗鞍を縦断する自転車イベントは、希望者殺到で抽選になる始末だ。既成概念にとらわれていては非日常

の楽しさを演出できるはずがない。関係各位には、観光客が自転車という選択肢を採る時代が近づいていることを認識していただきたい。

誰もやらないならやってみよう！

埼玉県にときがわ町というところがある。国民体育大会の自転車ロードレースの会場になったところで、白石峠という自転車で「登りたくなる」名所がある。この一帯は比較的車も少なく走りやすいため、ヘルメットにジャージ姿で超高性能ロードレーサーやマウンテンバイクでやってくる自転車乗りが多い。「来てくれるのは良いが、風のように通り過ぎて町の財政には全く寄与しない」と町議の方が相談の電話をかけてきた。



Bicycle Friend

**駐輪ラック有り
自転車大歓迎の店
お気軽にお立ち寄りください**

バイク・フレンド認定/NPO自転車活用推進研究会
認定事務局 東京都中央区新富1-1-1 1F TEL 03-5561-1111 FAX 03-5561-1112 E-mail info@bicycletokyo.org

「Bike-Friend」看板 デザイン案

「うまい蕎麦屋もあれば温泉もある。でも、自転車乗りは寄ってくれない。駐められる場所が必要だろうと思って、駐輪場を造った、という。見に行くと店の入り口を裏手に回った目立たないところだ。「人目はありませんよ、さあいたずらしてくだささい、盗んでください」と言っているに等しい。そう申し上げると、「そうか」と町役場に掛け合せて、自転車歓迎政策を練り上げた。ロードレーサーにはスタンドが付いていないのが普通だから、自転車置き場があっても立てて置くことができないということを説明すると、店内から食事しながらでも愛車が見える位置に、サドルを引っかけるタイプの自転車ラックを設置するという。本格派はビンディングシューズといって足をペダルに固定する器具の付いた靴を履いているから、裏の金具に潜り込むような砂利や碎石を敷き詰めた床はダメですよ、とお願いすると傷つきにくい舗装を店に勧めてくれた。派手な格好でヘルメットをかぶっているが、これが一番安全で快適なスタイルなので奇異な目で見ないでほしいと言うと、店主や従業員教育も心がけるといふ。いつそのこと、

そういう配慮をしていますよ、とアピールしてはどうか、と提案し「Bike-Friend」という看板を作る計画を進めている。安心して駐められる駐輪設備があり、自転車で訪れる客を歓迎すると宣言した店や施設に自転車乗りを誘導しようとするものだ。信頼性を高めるために全国の自転車活用推進研究会の会員がにかけていって、本当に歓迎する気持ちと態勢が整っているか審査して、広く情報提供するシステムに成長させたいと思っている。自転車を部屋まで持ち込めるホテルを見つけて「Bike-Friend」宣言してもらい、その看板を頼りに日本一周ができたなら……と夢は広がるのだが、まず第一に自転車が歩道の人間をけ散らして走るのを止めさせないと自転車の市民権は生まれない。のんびり歩いて観光できる環境のためにも、自転車は車道の左側通行原則に戻らなければならない。その前提は、今よりほんの少しだけ車が遠慮する社会なのが、黒塗りの後部座席から世の中を見ているのではなく、自転車の楽しさを知る政治家が増えてきたら、その日はきっとやってくるに違いない。

(こばやし しげき)

自転車で「走れば愉快だ宇都宮」 ——自転車のまち宇都宮を目指して

宇都宮市総合政策部 交通政策課

小川 恵太

宇都宮市の概況

宇都宮市は、人口約五十一万人、面積約四百十六平方キロメートルの都市であり、東京から北へ約百キロ、南北には東北新幹線、東北自動車道が、東西には北関東自動車道などが通る、北関東の中核都市です。

広大な関東平野のほぼ北端に位置しており、高台からは南に関東平野の地平線、晴れた日には富士山の雄姿を、北西には日光連山を望むことができます。地域の北部に丘陵地帯が連なり、北部から東部にかけては鬼怒川が貫流し、中央には田川が流れるなど、豊かで美しい自然に恵まれています。

宇都宮市の観光資源と サイクルスポーツについて

本市は、十五年連続で餃子の一世帯あたり

の年間支出額が一位（総務省家計調査より）となるなど、全国的に「餃子のまち」として知られており、市内には餃子専門店だけで三十軒以上、市内の餃子店等から構成される「協同組合宇都宮餃子会」には八十軒以上が加盟しており、週末には行列のできるお店も数多くあり、毎年十一月の第一土・日曜日には「宇都宮餃子祭り」が開催され、多くの観光客でにぎわっています。

また、国内や海外のコンクールで優勝するバーテンダーを多数輩出する「カクテルのまち」であり、ハイレベルなバーテンダーが腕を競い合っていることから、市外からもカクテル目当ての来訪者がいるほどです。

さらに、世界的に有名なジャズプレーヤーである「ナベサダ」こと渡辺貞夫氏のふるさとの街で、ジャズバーが数多くあるなど、「音楽にあふれるまちづくり」を目指すなか、



宇都宮餃子祭り

毎年秋には中心市街地でミヤ・ジャズインが開催され、プロ、アマチュアを問わず演奏家が集まり、最高のパフォーマンス

で宇都宮を盛り上げています。

また、スポーツも盛んな街であり、Jリーグデビュー2で活躍している「栃木SC」、昨年度、日本バスケットボールリーグ1部で優勝した「リンク栃木ブレイックス」、そして、自転車のプロレーシングチームの「宇都宮ブリッツェン」の三つのプロスポーツチームが本市を拠点として活動しています。

特に宇都宮ブリッツェンは、二〇〇八年（平成二十年）十月に発足した日本初の地

域密着型プロレーシングチームであり、サイクルロードレースに参戦するだけでなく、県内の学校や企業におけるウィーラースクールの開催やシンポジウムにおける交通安全教室の開催など、地域に根差した社会貢献活動を実施しており、自転車の普及啓発に尽力しています。

宇都宮ブリツェンが昨年七月に実施したサイクルリングイベント「うつのみやサイクルピクニック」では、市内外から約六百五十人が参加し、サイクルリングを通じて宇都宮の自然や観光スポットを気軽に満喫できるイベントとして好評を博しています。

サイクルピクニックのスタートおよびゴール地点となっている、本市北西部に立地する「宇都宮市農林公園ろまんちっく村」



うつのみやサイクルピクニック

は、イチゴやラベンダーなどの農作物の収穫イベント開催や販売のほか、レジャー施設として温泉などがあり、オリジナルの地ビールや餃

子の販売を実施しているなど、一日中家族で楽しめる施設です。

施設内には一千台規模の無料駐車場があり、「ジャパンカップサイクルロードレース」のコースになっている森林公園にも近いことから、県外から自転車愛好家が訪れるなど、サイクルリングの拠点にもなっています。

さて、「宇都宮市」「自転車」と聞いて、自転車愛好家のみなさんは「ジャパンカップサイクルロードレース」を思い浮かべるのではないのでしょうか。ジャパンカップとは、毎年十月に本市を会場に開催されるアジアにおける最高峰のロードレースの一つで、ツール・ド・フランスやジロ・デ・イタリアといった、世界の第一線のレースで活躍する選手たちを間近で見られる日本で唯一の大会です。

第十九回目の開催となった昨年は約七万人の観衆が集まりましたが、特筆すべきこととして、本レースの前日に宇都宮市中部の大通り一部区間を交通規制し、クリテリウム（周回型レース）を実施したことが挙げられます。都市の中心部における、世界のトップ選手が参加するクリテリウムの開催は国内初であり、沿道には約三万人の観衆が集まり、宇都宮ブリツェンの選手



ジャパンカップクリテリウム

も参加するなか、選手には熱い声援が送られました。

首都圏からの応援には、大会前日からプレミアムバスツアーやレース当日の弾丸バスツアーなどの限定ツアーもありますので、ぜひ宇都宮においていただきレースの風を肌で感じてください。

このように、自転車は本市にとって市民の最も身近な交通手段としての側面だけでなく、観光客を誘致する極めて効果的なツールにもなっており、観光やスポーツにも自転車を活用する施策を展開していきたいと考えています。

自転車を活用した

観光・スポーツの推進

近年の市民の環境意識や健康志向の高まり、余暇活動の活発化といった時代潮流の変化に伴い、自転車を取り巻く環境や市民ニーズが多様化していることをとらえ、昨

年十二月には、「環境」「健康」「観光」「スポーツ」などの新たな観点からの取り組みを加えた自転車の総合的な計画である『宇都宮市自転車のまち推進計画』を策定しました。

計画では、「自転車のまち宇都宮」の実現に向け、「だれもが安全に自転車が見える」「だれもが快適に自転車が見える」「だれもが健康とエコに自転車が見える」の四つの施策の柱を設定するとともに、具体的な施策事業を位置付けました。

施策の柱のうち、「だれもが楽しく自転車が使える」においては、自転車に乗りたくなるような環境づくりの推進や観光との連携、サイクルスポーツの振興による新たな自転車の魅力づくりの推進を取り組み方針に掲げるとともに、二〇一〇年（平成二十二年）十月からは、観光やスポーツと自転車を連携させた取り組みとして、「おもてなしレンタサイクル」と「宮サイクルステーション」の二つのモデル事業を実施しています。

①おもてなしレンタサイクル

レンタサイクル事業については、二〇〇五

年度（平成十七年度）から中心市街地の四カ所の市営駐輪場において合計百十台の放置自転車を再利用し、一日一回百円の利用料金で実施しており、二〇〇五年度には年間延べ利用者が約一万五千人であったものが、二〇〇九年度には約三万一千人に増加するなど、中心市街地を回遊する手軽な交通手段として人気を博しています。

そのため、現在、既存駐輪場でのレンタサイクルの増台や郊外部を含めた各駐輪場への実施拡大、電動アシスト自転車の導入による自転車の利便性の向上などを検討しています。



おもてなしレンタサイクル

このようななか、二〇一〇年（平成二十二年）十月からは、市内六カ所の宿泊施設にご協力をいただき、宿泊者向けの『おもてなしレンタサイクルモデル事業』を開始しました。内容は宿泊施設にレンタサイクルを設置し、宿泊

者に無料で貸し出し、来訪者の利便性を高める取り組みです。モデル事業の実施を通して、宿泊者のレンタサイクルへのニーズや運営の課題を整理し、将来的な観光レンタサイクルの導入につなげていきたいと考えています。

本市においていただいた時には、気軽にレンタサイクルを利用していただき、「餃子のまち」での食べ歩きなどをしてみてはいかがでしょうか。宇都宮餃子祭り当日は、市営駐輪場のレンタサイクルを無料開放していますので、ぜひご利用ください。

②宮サイクルステーション

本市では、『ジャパンカップサイクルロードレース』の開催地であることから、休日には市外からも多くの自転車愛好家が訪れ、JR宇都宮駅周辺において自転車を組み立てる姿や、ジャパンカップサイクルロードレースのコースなどを疾走する姿をよく見かけます。

また、近年は自転車通勤者などが増加傾向にあり、JR宇都宮駅周辺の駐輪場の利用者も増加している状況にあります。

そのようななか、昨年十月に、より快適

に自転車を利用できる環境の創出に向けて、休憩や自転車の修繕が可能なスペース、シャワー・トイレ施設、観光スポットなどの「まち情報」を提供するモデル施設『宮サイクルステーション』を設置しました。

宮サイクルステーションは、通勤・通学者や観光客など、多くの自転車利用者が集まるJR宇都宮駅西口に立地しており、鉄道やバスなどの公共交通機関へのアクセスが良く、約三千台の規模のJR宇都宮駅西口駐輪場に隣接しているなど、通勤・通学者など日常的に自転車を利用している人だけでなく、観光客やビジネス客にも利便性の高い場所にあります。

施設では、休憩や自転車の修繕のためのスペースなどを完備するとともに、クロス



宮サイクルステーション外観



スポーツバイクセミナー



「宇都宮愉快市民第1号」
宇都宮ブリッツェン廣瀬佳正選手

外への情報発信に努めています。この取り組みの一端として、日常的に自転車安全教室や清掃活動などの地域貢献活動を

バイクやロードバイクなどのスポーツバイクのレンタルを実施しており、市外から観光やビジネスで来訪される方々にもご利用いただいています。

また、この宮サイクルステーションは、自転車利用者の利便性向上だけでなく、「自転車の利用・促進」に向けた取り組みも実施しており、宇都宮ブリッツェンと連携し、「スポーツバイクセミナー」として、自転車の乗り方や修理の仕方などの各種講座も開催しています。

今後のプロモーション

ある「宇都宮愉快市民第1号」に任命されました。

現在、本市では、宇都宮「らしさ」を広くアピールしていくため、「住めば愉快だ宇都宮」をブランドメッセージとして、市内外への情報発信に努めています。この取り組みの一端として、日常的に自転車安全教室や清掃活動などの地域貢献活動を

以上のように、自転車に関する取り組みや活動については「餃子」「カクテル」「ジャズ」と並んで、宇都宮市の魅力を高める貴重な個別ブランドであることから、「住めば愉快だ宇都宮」の都市ブランドメッセージと連動した「走れば愉快だ宇都宮」を、自転車のまちづくりの魅力や目指すべき将来像を市内外に伝えるメッセージとして積極的に情報発信し、市民の誰もが宇都宮市を「自転車のまち」として誇れるよう、全力で取り組んでいきたいと考えています。

(おがわ けいた)



「走れば愉快だ宇都宮」
PRポスター

積極的に行っている宇都宮ブリッツェンの廣瀬佳正選手が、宇都宮のPR大使で

世界に誇るサイクリングコースしまなみの展望 ——住民参画の自転車まちづくり

NPO法人シクロツーリズムしまなみ 代表理事

山本 優子

自転車の聖地しまなみ

愛媛県今治市と広島県尾道市を結ぶ西瀬戸自動車道。「しまなみ海道」の愛称で親しまれるこの橋は、本州と四国に架かる三つの橋のなかで、唯一、自転車歩行者専用道路が併設されている。全国の自転車愛好家から「一度は走ってみたい」と熱い眼差しが集まっており、先般、日本経済新聞のおすすめサイクリングコースランキングで堂々の一位となった。

古の時代から海上交通の要衝であった瀬戸内海。朝鮮通信使や外国交易船の乗組員もその美しさを絶賛したと伝えられる。「しまなみ海道」の開通は、この魅力を自転車でも体感できるものに変えた。なかでも今治市陸地部と大島に架かる「来島海峡大橋」は一押しの大橋である。ジェットコース

ターさながらのループを上ると海拔約七十七メートルの橋上に着く。一直線に延びるレーンでペダルをこげば、気分はまさに空中散歩である。

大島・伯方島・大三島・生口島・因島・向島という六つの島をつなぐ「しまなみ海道」。島々にはそれぞれ個性があり、住民性も少しずつ違う。だが一貫しているのは、住民のホスピタリティあふれる歓待の心。メインコースを離れて傍らの小道へ、山裾に見える集落へと、ゆったりのんびりの寄り道サイクリングがおすすすめだ。暮らしの息遣いにぼつと包まれ、気さくに話しかけてくる住民との会話も楽しい。

地域の宝を磨く住民の試行錯誤

本会では、二年前から自転車ツアーの企画運営を行っている。自転車旅行者の琴線



急流に圧倒される全長約4キロの大橋散歩

に触れる独特の空間と時間を演出しているところ好評だ。その契機となったのは、二〇〇五年（平成十七年）から行われた住民

主体の「サイクリングモデルコースづくり」という事業。過疎・高齢化の進行、農漁業の衰退、商店街の疲弊など、地域の課題が山積するなか、観光や交流の促進により島を元気にしていきたいと願う有志が集った。

便利で身近な交通手段として「自転車」保有率の高い日本では、自転車に乗ること

ができない人は少ない。しかし、活動当初はツーリズムを目的とした自転車の利用について、なかなかイメージが膨らまなかった。通学や買い物で使う移動手段、もしくはピツタリしたウエアに身を包みスピードを競う自転車レース、そんな両極端のイメージしかなかったからだ。メンバーの議論も、目的地や立ち寄りポイントを結ぶ二次交通として自転車を捉えるにとどまっていた。

その後、巻頭言を記した白鳥氏を筆頭に、自転車旅行を「文化」として捉え、そこに面白さを見いだす自転車乗りたちの存在が、私たちの活動に大きな示唆を与えてくれた。

自転車旅行者自線のマーケティング

二〇〇七年（平成十九年）に、自転車旅行者がしまなみに求めるニーズについてマーケット分析を行った。調査に先立ち、自転車の専門家と一緒に、住民が提案した「サイクリングモデルコース」を試走。それが大きなターニングポイントとなった。彼らの走り方は画期的に違っていた。ふいに立ち止まり、小道を見つけて進んでいったり、好んでコースをそれ、路地裏へ迷い込んだり。目的地を点として結ぶことばかり

考えていた私たちにとって、それは目からウロコの行動だった。自転車の旅は、移動の過程をも楽しむ「線の旅」だったのだ。

この気づきを前面に押し出し、一泊二日のモニターツアーと全国三千人を対象にしたウェブアンケート調査を実施。提案のコンセプトは、「しまなみスローサイクリング」。スローは、スピードが「ゆっくり」なだけではない。人と人、人とモノ、人と自然などの「つながり・思いやり」に価値を置き、豊かな生活をじっくりと熟成させていく、古くて「新しい」物の見方であり、地域の文化である。



路地裏での出会いに会話も弾む

という不安は、「ありのままの日常でいいのだ」という自信に変わった。「収穫の手を止めて話をしてくれた」「自家製の味噌汁がおいしかった」といった感想は、農家による「畑deカフェ」の開店や自転車旅行者向けの携帯用弁当「二輪弁」の商品開発につながった。

ニーズが高い「マップ」を作成

自転車旅行者受け入れの基盤整備の重要な要素として、標識やマップの充実が挙げられる。実際、しまなみ海道は自転車用の標識が充実している。「統一されたデザインで、走行中の位置や距離がわかりやすい」との声を聞く。これは「自転車モデルコースづくり事業」と並行して設置されたものである。そして、住民自らがロード調査を行い、ポイント指定したスペースには自転車旅行者向けの休憩所が整備された。コースづくりなどのソフト事業とともに、ハード事業が住民参画型で進んだことは、自転車旅行者受け入れの地元モチベーションを高めるという大きな効果を生んでいる。

「マップを見るだけで走ってみたいくなる」、そんな声が寄せられる本会の自信作



問い合わせ殺到中の「島走マップ」



継続要望が高いサイクルトレイン 車内風景

「島走マップ」も、マーケットを意識して発行した。しまなみ海道の全体図やイラストマップは存在したが、島の中を自転車で楽しむための自転車ロードマップがないことに着目。既存のマップとの差別化を意識し、島内の道という道をすべて自転車で実測。情報区分、緻密な距離と高低差などを自転車目線で編纂した。昨年、愛媛県側の島四部を発行し好評だったことを受け、現在、広島県側の島を対象に発行準備を進めている。

公共交通と連動した基盤整備

二〇〇九年に十回、二〇一〇年に十六回

「サイクルトレインしまなみ号」を運行した。これは自転車でしまなみ海道を楽しむ愛호가飛躍的に増えているなか、マイ自転車で走りたい人のためのアクセス改善策として、愛媛県とJR四国との連携で実現した臨時列車である。愛媛県の県庁所在地にある「JR松山駅」としまなみ海道最寄りの「波止浜駅」を結ぶ。通常、公共交通機関を利用する場合、自転車は専用の袋（輪行袋）に詰めて持ち込まねばならない。「サイクルトレイン」は自転車を解体せず、そのまま車内に持ち込める手軽さが幅広い年齢層に支持された。

自転車を積み込んで船で島へ渡るツアー

も実施。海から島を眺める楽しさもこの地域ならではの。公共交通の促進と自転車環境に優しいまちづくりにも通じる提案は、自転車旅行文化の定着を使命とする本会の役割の一つだと感じている。

自然と人をつなぐ案内人

「ポタリングガイド」

自転車に特化した旅行商品の造成、販売は始まったばかりだ。地元でしか味わえない体験や食、土産など、地元住民が素材を集め、提供者となる。旅行者の旅の目的地(着地)側においてプランニングされることから「着地型旅行商品」と言われるが、こうした地域主導の商品の要の一つは案内人である。自転車の専門知識を有し、かつ旅行者と地域との橋渡しをする「ポタリングガイド」が本会の自転車ツアーでの案内人だ。「地元の人と仲良くなれた」「一人では行けない隠れスポットに感動した」「故障やパンクの心配がなく心強かった」と、その役割は好評で、定期的に参加してくれるリピーターが多い。

ガイドの中心人物を紹介したい。サイクルマップの作成、サイクルトレインをはじめ

め基盤整備の指南役も務める宇都宮一成^{うつのみや せいせい}である。一九九七年（平成九年）から十年という歳月をかけて世界五大陸・八十八カ国・十万五千キロに及ぶ自転車旅行を成し遂げた。旅に使った自転車は「タンDEM自転車」。二人分のサドルとペダルを装備し、二人一緒に乗ることができる自転車。なんと、彼は妻トモ子さんと二人で世界一周を敢行したのだ。トモ子さんはインドア派で自転車は苦手だという。なるほど、タンDEM自転車はスポーツが苦手な人にもうってつけなのだ。「パートナーと一緒にサイクリングに行ってもペースが合わない」と敬遠してしまうケースは意外と多い。そうした場合でも、お互いの体力差をカバーしながら、二人で一緒に息を合わせて前に進むことができる。体験を共有し、コミュニケーションを育むタンDEM自転車の利用は、本会が提案するスローサイクリングのコンセプトに通ずるものがある。

日本では「自転車の二人乗り禁止」という規則があり、一般公道を走れないため、見かけることが少ないが、ヨーロッパやアメリカではポピュラーな乗り物だ。「これはしまなみ海道で楽しめるようにせねば」と、

愛媛県に規制緩和を提案した。県警をはじめ、関係者の尽力により、二〇一〇年八月、県道路交通規則の一部が改正され、県内全域で二人乗りのタンDEM自転車が走行できるようになった（二〇一〇年十月には、広島県でも走行が認められ、しまなみ海道全域で走行可能となっている）。解禁を受けて二〇一〇年九月には、自転車に乗る機会が少ない視覚障がい者の方々に、後部座席でサイクリングを楽しんでもらう「ブラインドサイクリング二〇一〇」、十一月には男女のペアがタンDEM自転車で交流する「恋活サイクリング」など、さまざまな趣向のツアーを実施した。



タンDEMで海道を行く宇都宮夫妻

老若男女を問わず、さまざまな人がサイクリングを楽しめる環境が整ったしまなみ海道。風景はもちろんだが、五感を

刺激するバリエーション豊かなツアーが組めるベストエリア、しまなみがなせる技だ。「しまなみの暮らしに共感してくれる旅行者を増やす」「住民が無理をせず継続的に関わる仕組みをつくる」。活動当初からこの二つの思いは変わらない。しまなみの暮らしに共感し、サポーターになってくれる自転車旅行者とのつながりを日々大切に、これからも活動が続けていきたい。

シクロのツアーで、しまなみ制覇

シクロツアーの概要をご紹介します。
レギュラーツアー…ご希望日に出発
島の個性を見つける「ぐるり1周ツアー」
イベントツアー…日にち限定のお得ツアー
四月三日（日）「グルメポタリング」
六月五日（日）「タンDEMポタリング」
七月三十一日（日）「畑deカフェ」
八月六日（土）七日（日）「安芸灘・とびしま海道を走る 瀬戸内海ぐるり」
九月十日（土）十一日（日）「しまなみ海道を行く しまなみ島走サイクリング」
詳細は本会HPをご覧ください。
<http://www.cyclo-shimamami.com/>

（やまもと ゆうこ）

『旅チャリ』で町に優しく、「旅」は楽しく

——JTB48と『旅チャリ』と

株式会社JTB首都圏 首都圏ビジネス開発推進室

マネージャー

高知尾 昌行

その土地の素晴らしさを、限られた「旅」という時間のなかでたくさんの人に知ってもらいたい。

「なぜ、旅行会社がこんなことをやっているのですか?」、これが一番される質問です。そこで『旅チャリ』を紹介する前に、JTB首都圏ビジネス開発推進室と当室が進める取り組みについてご紹介させていただきます。

ご存じ、JTBは旅行会社です。

しかし、昨今の急激な市場の変化と旅行ビジネスモデルの形態の変化に合わせ、JTBには将来的に成長する分野を開拓する必要性が出てきました。そこでJTBグループでは、二〇〇四年（平成十六年）からの前にJTBと関わるお客さまを増やすこと、具体的には旅行を主軸として事業領域を広げることによる交流文化産業へ挑戦し

てきました。さらに、二〇〇六年には、全国地域会社に『交流事業』に専門特化した部署を作り、地域の活性化と地域コンテンツの開発に取り組んできました。

そんななかで遅れること約二年、二〇〇八年四月に首都圏交流事業推進室（現ビジネス開発推進室）が産声を上げました。「観光・旅」を主軸にした交流事業の川上の営業推進により、首都圏内外における交流人口を増やし、未来に向けて「持続可能な」社の事業の柱を作ること。これがJTB首都圏における首都圏交流事業推進室（当時）の目指すところで、今も変わりはありません。

そこで開発した、ひとつのコンテンツが『旅チャリ』です。

サービス開始当初、『旅チャリ』は、『旅先で乗る自転車』くらいのご感覚でした。ただ何となく、

テーマは【観光】【環境】【健康】で……。レンタサイクルが電動自転車だったら楽だろうなあ……。

とイメージしていました。サービス開始以降、問い合わせを受けるうちに、『旅チャリ』とは何か定義を決める必要に迫られました。にもかかわらず、緩い定義で進めてきました。

その緩い定義は、

『旅チャリ』は【観光】【環境】【健康】をテーマに、【保険】と【点検】をパッケージにしてリリースする電動アシスト自転車』

でも、電動でなくてもいいかな……。など、思うところは多々あります。

『旅チャリ』の仕組みは至ってシンプルです。わかりやすかったからか、受注第一号は、当時の新人社員からでしたし、「○○チャリ」といった類似ビジネスも多く出てきま

した。これは旅行者（利用者）にとっても良いことですね。旅行パックのように、電動アシスト自転車に貸出個所が必要なニーズをパッケージにして、クライアントにリースします。ここでのJTBの役割は、自転車メーカーのサービス代行店（販売店）と、地域の貸出個所をつなぐ橋渡し役となることです。貸出個所は、自由な料金で、自由な方法で、そして自由なネーミングで、お客さまに提供していきます。この仕組みは、サービス開始当初から変わりません。

これまでの『旅チャリ』を、四つの視点でご紹介したいと思います。

まず一点目は、『旅チャリ』が社会から評価されたと実感した瞬間。これは何といても、二〇〇九年度エコプロダクツ展エコサービス部門において大賞（環境大臣賞）を受賞したことです。当時の小沢鋭仁環境大臣が『旅チャリ』の試乗にいられました。さまざまな業界のメーカー各社がしのぎを削るエコプロダクツ展において、JTBが、イベント主催者や後援する中央官庁から高い評価を頂きました。

二点目は利用目的の視点です。稼働地域

は温暖で通年利用できる地域を想定していたのですが、最近では北海道・北陸など降雪地域からの問い合わせ、申し込みも来えます。そこで昨年から、冬季に稼働しない地域向けの料金プランも用意しました。利用目的のほとんどはレンタサイクルですが、なかには面白い利用目的があります。うなぎ屋さんの配達、小高い丘の上にあるアパートの住民サービス、日本一周といった内容です。大学生から『旅チャリ』での日本一周の熱烈な売り込みを受け、提供し、ウェブページでも追いかけて九カ月かけて無事日本一周を達成しました。内心ひやひやものでした。

三点目はクライアントの視点です。当初はホテルや旅館を期待していましたが、サービスを開始すると、法人組織である観光協会や自治体などが半分以上を占めました。『旅チャリ』事業として、地域の回遊性の向上や地域活性化を目的に、国や自治体の補助金を利用するための相談が増えました。四点目は少し視点を変えて、国・自治体との『旅チャリ』の仕組みを使った取り組みを一件紹介させていただきます。

それはコミュニティサイクル（公共自転車

車の共同利用）です。

コミュニティサイクル実現へ向けた、地域と一体となったJTBの取り組みは、その土地の良さを生かす『旅チャリ』の考えから派生しています。優秀な人の出張によるコンサルティングや洗練された企画書は客観的な視点からの有益な情報にはなりますが、事業を続けていくためには、地域目線が絶対に必要です。JTBが作る地域のコミュニティサイクル事業チームに特定の形はありません。あるのは《概念》だけです。その地域の特性を最大限に生かし、その地域に最適なハードとソフトをつなぎます。その地域の素晴らしさを、限られた「仕事」「生活」そして「旅」という時間のなかで、できるだけたくさんの人に知ってもらいたい。コミュニティサイクルの基本は電動アシスト自転車ではありませんが、『旅チャリ』の仕組みが公共交通に貢献し、都市部が観光素材になることでJTBグループの「旅」の領域が広がっていいと考えています。

二〇〇九年（平成二十一年）十月、環境モデル都市である千代田区丸の内（トラベルゲート有楽町・丸の内支店）で始まった、

日本型コミュニティサイクル(無人化)のムー

ブメントは、二〇一〇年九月のさいたま市(浦和支店)、十月の名古屋市(JTB東海三店舗)と進化を続け、二〇一一年三月からは、今までで最長(二年以上)の社会実験として広島市(広島支店ほか二店舗)でスタートする「のりんさいくる HIROSHIMA」に参画させていただき持続していきます。ぜひとも広島に来てください。言葉や写真では伝わりません。そして乗って、広島町を楽しんでください。「あつたらいいなあ」と思ったら、皆さまが住む町の人に伝えてください。ゆっくり、ゆっくりと伝わっていきます。

最後に少しだけ未来のことを書かせていただきます。あくまで夢のような目標は大小合わせて六つあります。

一つ目は、稼働台数二千台です。二つ目は、百五十カ所の貸出個所です。

大風呂敷ですが、将来的に、全国満遍なく、チェーンホテルのように、『旅チャリ』Ⅱ《整備があり、保険が付いている自転車》というイメージが消費者に共通認識として根付いていただけると素敵です。

三つ目は『旅チャリ』の仕組みを活用した、

コミュニティサイクルの定着です。

地域のJTB支店がサービスプロバイダーとなるコミュニティサイクルには、地域とともに歩んできたJTBグループのインフラがお役に立つことと確信しています。四つ目はエコ・低炭素に対応した観光地づくりのお手伝いです。

近い将来、電気自動車が都市部で普及していくには、遊びに行く先の充電インフラは不可欠です。

ニワトリが先か、タマゴが先か。この『旅チャリ』から始まる旅人のニーズを観光地に定着させるお手伝いは、箱根町でスタートしました。現在は富士箱根伊豆国立公園にある三十六市町村の定期的な勉強会事務局を環境省・関東地方環境事務所、国土交通省・関東運輸局、国土交通省・中部運輸局の後援の下で運営しています。

五つ目は、インターネットでの『旅チャリ』つき宿泊プランの発売です。

そして最後の六つ目は、海外リゾートでの『旅チャリ』展開です。感覚的ではありませんが、ハワイ・ホノルルにニーズを感じています。

ここからは地域のことをこよなく愛し、

地域の粋を伝える地域の達人、その名もJTB48によって各地のこぎ方を紹介してもらおうかと思えます。

JTB48とは、四十七都道府県に一人ずつ、「この近くでうまい店ないかな?」「今の旬は?」はたまた「どっか行くとこない?」といったセリフに、粋な答えをくれる老若男女の達人たち。そして、リーダーはみんなを束ねて日本の粋を世界に発信していきます。

これは私見ですが、「旅」は行った人に聞け、「町」は住んでいる人に聞けと……。

ほっこり 湯河原温泉のこぎ方

JTB48 | かながわ 神奈川県西支店
飯山敦史からの便り

湯河原温泉は、首都圏を中心に静かな人気の温泉地として知られています。こんなに小さな温泉なのに、ランキングは毎回十位前後。奥ゆかしくて、決してトップ10には入りません。

ところがどっこい、老若男女問わず幅広い年齢層の方々に、お楽しみいただける町です。住んでみるのも良いですよ。

日本の歴史公園100選に選ばれた「万葉公園」、ステンドグラス・陶芸・型染め・

そば打ち・和菓子作りなどが楽しめる体験工房、毎週日曜日早朝に開催される「朝市」、足湯という単語を定着させたと言われる「独歩の湯」、落差十五メートル、迫力があるのかないのかわからない「不動滝」、標高わずか六百二十六メートルの「幕山」は、早春に約四千本の紅梅・白梅が美を競い合いつつ、実はハイキングやロッククライミングでも知られています。

十月から十二月がシーズンとなる「湯河原みかん」狩り。相模湾に向かって開けた南向きの斜面には、みずみずしい果実たちがたわわに実り、人々の訪れを待ち焦がれています。また最近では、湯河原発のB級グルメ「湯河原担々やきそば」も約三十店舗で味わえます。

縦長で山あいの、つまみ食いだらけの湯河原温泉散策には、『旅チャリ』がピッタリです。のんびりとお楽しみください。

港町、銚子のこぎ方

JTB 48—とうきょう23 今 亀戸支店
下村徹也からの便り

銚子は初日の出が本州で最初に見える港口。東の東に位置する車社会です。市内ア

クセスはあまり良いとは言えません。東京から特急で二時間強、銚子駅に降り立ち、「ちよつと港でマゲロでも！」とはさすがに思わないですよ。

そんな銚子に市内アクセスの救世主『旅チャリ』が導入されました！ 向かい風や急峻な坂道にもラクラク対応、皆さまを快適に、そして小腹をすかせて港へと誘ってくれるでしょう。さらに、東洋のドーバー海峡と呼ばれる「屏風ヶ浦」、初日の出が本州最速で拝める「地球の丸く見える丘展望館」と「犬吠埼灯台」は必見です！

銚子といえばグルメも欠かせません！名産の「生まぐろ」や「やりのいか」をはじめとした海産物とそれをネタにした寿司も見逃せません。『旅チャリ』加盟店に立ち寄れば割引などの特典も盛りだくさんです。ちよつとした人とのふれあいやすくてきな風景を見つめる旅。「早すぎず、遅くへ快適に！」銚子の町をのんびりとお楽しみください。

八丈島のこぎ方

JTB 48—とうきょう23 丸の内支店
木村洋平からの便り

二〇一〇年（平成二十二年）七月一日、八

丈島名物へ向けて『島チャリ』がサービスを開始しました。八丈島のちょうど中心にある八丈島観光協会（04996-2-1377）にて、観光の足として、また島民の方の足として活躍しています。ここでの特徴は、バッテリー充電に、自然エネルギーの宝庫であるエコアイランド八丈島の風力と地熱を活用していることです。町役場には高さ九メートルの風力発電機（見に来てね）が立ち、『島チャリ』を温かく見守っています。モデルコースはすべて島民オリジナル。まずは南原海岸コースと温泉巡りコースを用意しました。島民しか知らない見どころが盛りだくさんのコースです。『島チャリ』は坂道の多いひょうたん形の八丈島でも、風を感じながら、真つ青な海と豊かな森を兼ね備えた景色をたっぷり味わえます。自然豊かな八丈島でたくさんのお見が皆さまを待っています。

広島島のこぎ方

JTB 48—ひろしま 広島支店
山本隆之からの便り

広島島の観光は断然自転車がgood！「ふるさと雇用再生特別基金事業」の一

環として始まったこの「ECOの街広島レンタサイクルプロジェクト」は広島市内五カ所のホテルに貸出個所が設置されています。ズバリ、観光レンタサイクルと観光案内の融合です。ロビーに設置されたデスクにいる個性あふれるスタッフが広島を訪れる皆さまを広島らしさでもてなします。広島はコンパクトな町で、川が多く、その川辺にはおしゃれなカフェがたくさんあります。ちょっと自転車を止めて、水辺のカフェでティータイムはいかがですか？

ちりくんと広島旅チャリブログ (http://www.jibco.jp/shop/ShopBlog.aspx?shopid=524&branchno=2)

熊本のごぎ方

JTB48 くまもと 熊本支店

やまもとあまのみ
山口章宏からの便り

熊本の達人(自分で言うなよ!)は、「熊本市観光客回遊性向上モデル事業」として、中心部十カ所で、『旅チャリ』を使った観光型レンタサイクルの社会実験を行いました。各ステーションには常に案内人が待機し、自転車の解説のほかに、今が旬の

観光地や穴場スポットなど、地域の付

加価値の提供に努めました。その結果、寄り道があったり、滞在時間が長くなったりと、貸し手と借り手の両者にとって好評のうちには実際は無事終了。三月十二日には九州新幹線が全線開通、また三月五日、熊本城下に観光交流施設「桜の馬場 城彩苑」がオープンしました。熊本では三月初旬から五月にかけて、同様の事業が行われます。「桜の馬場 城彩苑」は熊本の観光案内機能も有し、レンタサイクルステーションも設置。まずは城彩苑にお越しいただき熊本の情報をゲットし、自転車を使って、春真っ盛りの熊本の町をゆっくりとお楽しみください。

古都 首里のごぎ方

JTB48 おきなわ JTB沖縄

こきなわあま
小宮啓明からの便り

琉球王朝時代の王府である首里は独特の歴史、文化を抱え、世界遺産としても登録されており、年間二百万人を超える観光客が訪れます。人気スポットであるが故に、レンタカーや大型バスが主流となっており、城下に広がる歴史ある町並み、貴重な遺跡、

琉球古来の御獄(うたぎ)などは

見過ごされてきました。この歴史ある城下の町並み散策を楽しむための新しい取り組みが、『旅チャリ』です。首里における旅チャリは、この首里のまちづくりを推進する「NPO法人首里まちづくり研究会」が中心となっており、サービス開始。坂の多い首里に住む古老の方々、首里城の歴史再現に尽力された方々から首里の魅力と歴史遺構の情報を収集し、電動アシスト自転車の利点を最大限に生かしたサイクリングマップを作成しました。今年、琉球王朝時代の首里を舞台とした人気小説『テンペスト』が県出身の人気女優仲間由紀恵さん主演で舞台化、さらにドラマ化も予定されています。読谷(よんたに)のことも少しだけ。サトウキビ畑の広がる農道の雰囲気をお楽しみする沖縄県中部の読谷村にも『旅チャリ』をご用意しています。首里ともども沖縄らしい景色を楽しめますよ！

恋の町横浜のごぎ方

あっ!! ページが終わってしまいました。この続きは旅先で感じてください。

(たかちお まさゆき)

イベント継続の意義と秘訣

「天領日田おひなまつり」はなぜ二十八年間も続いているのか

財団法人日本交通公社 旅の図書館 副館長

主任研究員

朝倉 はるみ

二月から三月にかけて、全国各地の観光地でひな祭りが開催されています。冬期の誘客事業として定着したと言えますが、その先駆けとされるのが大分県北西部に位置する日田市の「天領日田おひなまつり」です。一カ月半に及ぶロングランイベントですが、民間主導で三十年近く続いています。

今回は日田のおひなまつりを例に、イベント継続の意義と、その秘訣を探りました。

日田のおひなまつり誕生の背景と目的

日田市は、かつて徳川幕府の天領（直轄地）であり、当時の町並みが残る豆田町まゐだは重要伝統的建造物群保存地区に指定され、日田市全体では二〇〇九年に四十七万二千人が宿泊しています。

しかし、一九八四年におひなまつりが始まる前、一九七〇年代の豆田町は、区画整理事業で

にぎわう日田駅の裏側に位置しており、見るものもなく、古い建物だけが残る寂れた商店街でした。当時は、近代的なビルを建てることイコール商店街活性化であり、企業誘致イコール町の再生、という考え方が主流でしたが、現在（社）日田市観光協会会長である石丸邦夫氏が、「住民が生き生きとして商売・経済が活性化するには、また若者が家業を継ぎたいと思いうようにするには、どうすればよいか」と考え、たどりついた結論は「いつでもにぎわう町」、つまり「人（客）がいれば商売も成り立つ町」になる、そのために日田に「観光」を取り入れる、というものでした。

一九七六年に仲間十五人で「日田の明日を考える会」（以下「考える会」、注1）を結成、日田

市の歴史や文化の特異性・独自性について勉強し、一九七七年には飛騨高山に視察に行っています。二月という旅行のオフシーズンにもかかわらず観光客でにぎわう飛騨高山を見て、考える会のメンバーは高度経済成長時代にも取り壊されなかった古い町並みが残る豆田町を生かせば、日田も飛騨高山のような町、つまり「年中観光



「天領日田おひなまつり」のチラシ（日田市作成）。おひなさまは「雛御殿」所蔵の200年ほど前の古今雛

客でにぎわう町」になれるのではないかと、とりかかっています。

飛騨高山視察の後、考える会は豆田町商店街の方々に豆田町の生きる道、つまり「飛騨高山のような町になること」を説明しますが、駅前と同様の区画整理事業の導入を希望する人も多く、また豆田町の歴史や伝統の素晴らしさを商店街の人たちが知らなかったため、なかなか理解されなかったそうです。

そこで、まずは豆田町商店街の方々に「地元の歴史や伝統の価値を理解してもらうこと」を目的として、一九七九年、豆田町での「第一回天領まつり」開催にこぎ着けます（日田市主催。現在も継続）。二日間で三万人が集まりましたが、祭りが終わると元の寂れた商店街に戻ってしまふ。そこで石丸氏は一九八二年、自ら豆田町にコーヒーストップをオープンし、「飛騨高山のように年中観光客でにぎわう町」を目指して、本格的に豆田町の町並み保存・整備に取り組むことにしました。まずは豆田町の古い家屋を観光施設として活用すべく、廣瀬家（商家）には資料館としての常設展示、草野本家（県内最古の商家）には江戸・享保年間（一八世紀前半）のひな人形の一般公開を働きかけました。古い家屋やひな人形は豆田町の歴史や文化が具現化されたものであり、

それらで観光客呼び込むことができれば、地元商店街にも町並み保存に関心を持つてもらえるだろう、とのもくろみでした。

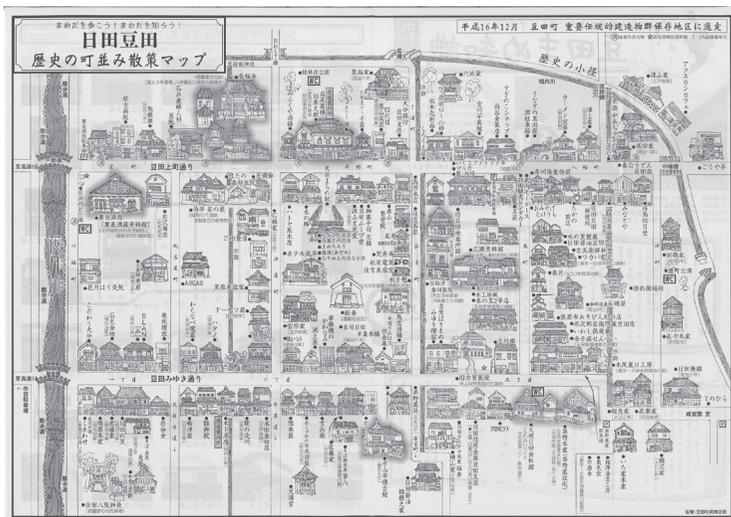
こうして一九八四年三月、草野本家一軒だけの「第一回柗屋（草野本家の屋号）おひなまつり」が開催されます。開催前に石丸氏が知り合いのNHKディレクターに取材を依頼。開催直前にNHKで紹介されると初日に三千人が来訪し、二十五日間で八万五千人の観光客が豆田町を訪れました。

「おひなまつりで観光客を呼ぶ」という目的は達成され、すぐに翌年の開催が決定。その後は町並み保存に対する商店街の意識も変化していきました。

「通年にぎわう町」に向けた町並み整備

考える会が目指していたのは、イベント

期間だけでなく、通年にぎわう町であり、そのための（飛騨高山のような古い）町並み整備が不可欠でした。おひなまつりスタート前年の一九八三年に「豆田地区町並み保存推進協議会」を立ち上げ、家屋の実態調査や町並み保存事業地区の指定および融資事業、地区景観ガイドプラン作成等に着手していきます。一九八九年以



豆田町の町並み散策マップ

降、国土交通省や県の事業が導入され、遊歩道やポケットパーク、石畳、街路灯等の整備、商店街のファサード改修、主要な二つの通りの電線類地中化（注2）といったさまざまな事業が完成。伝統的な町並みを再現しました。こうした取り組みの結果、豆田町は国土交通省の二〇〇一年度「美しいまちなみ大賞」を受賞、二〇〇四年

には重要伝統的建造物群保存地区に指定されました。第一回目からおひなまつりの会場である草野本家も、二〇〇九年に主屋など四棟とその敷地が国の重要文化財に指定されました。

一九八三年の「豆田地区町並み保存推進協議会」発足から約三十年、豆田町は美しい町並みを有し、通年にぎわう観光地となりました。おひなまつり期間も、観光客はおひなさまとともに、その展示施設である古い家屋や町並みも楽しんでいくのです。

変化するおひなまつり

時代とともに日田のおひなまつりも変化を続



おひなさまを展示している店にはピンクの「のれん」がかかっている（豆田町）



店先にもおひなさまが飾られている（豆田町）

けています。

①観光客受け入れ態勢の変化

豆田町でのおひなさま展示施設は、一回目（一九八四年）は草野本家のみ、二回目は前年十月にオープンした廣瀬資料館（江戸時代の器具・書物等の民俗資料館）も展示施設として加わりました。その後、古い家屋を整備して観光客に公開するようになった施設でもおひなさまを公開するようになり、二十八回目となる二〇二一年は八軒（うち有料五軒）が日田市作成のパンフレットで紹介されているほか、飲食店・土産物店等でもおひなさまの展示を行っています。

おひなまつりの期間も、以前は三月だけでしたが、二〇〇五年ごろからお客様からの要望もあり、現在のような二月十五日から三月末まで期間を延ばしました。

田町への出店希望者も徐々に増加してきました。おひなまつり初年度、豆田町の観光客向け飲食店・土産物店は二十軒ほどでしたが、現在では百軒ほどに増加。飲食店よりも土産物店が多いようです。近年は市外・県外の若手による出店も増えましたが、オーナーの大半が日田市内の方であるため、お店の入れ替わりもそれほど多くなく、安定した商売ができる観光地でもあります。日田市内のおひなまつりの開催エリアも増えていきます。豆田町とJ.Rを挟んだ所に位置する隈町は一九八九年から、天瀬古園地区では二〇〇五年からおひなまつりをスタートしています。隈町・豆田町は徒歩で二十分ほどですが、観光客の流動促進のため、日田駅前にある日田市観光案内所ではレンタサイクルも用意しています。二〇二一年からは日田市観光協会が「天領日田おひなめぐりクーポン」（レンタサイクルや市内十五施設で利用可能なクーポン券四枚セット、千四百円）の販売も開始しました。

二〇〇八年からは地元ガイドによる「おひなめぐり散策ツアー（有料）」も催行しています。二〇一一年は個人向け三コース、団体向け四コースが設定され、個人向けは所要時間二時間、毎日午前と午後に行われます（注③）。

また、おひなまつり期間中には、「女子遠的弓

道大会（隈町）」「健康マラソン」「あまがせゆずさんぽ」「日田おおやま梅まつり」といった各種イベントも開催され、日田市への集客の相乗効果を狙っています。

②観光客の変化

おひなまつり期間中の観光客数（豆田町と隈町の合計）は一九八九年から日田市が推計値を発表しています。一九八九年は四万六千人、その後次第に増加し、二〇一〇年は十三万八千人と、約二十年で三倍に増加しています。観光客の半数は福岡からで、リピーターが多いそうです。



お座敷に展示された数多くのおひなさま（豆田町）



高校生アルバイトがおひなさまの説明をしてくれる施設もある（隈町）

の観光地にも行きやすい場所にあります。さらに、九州各地でも一九九〇年代に入るとひな祭りを開催する観光地が増えてきました。こうした外部環境の変化もあり、特に団体での旅行者は豆田町での滞在時間が短くなっています。一方で複数のひな祭りを見るため、滞在時間の短縮は消費単価の減少にもつながっています。

おひなまつり継続の意義

二月下旬から三月にかけては陽気も良くなり、人々の旅行意欲も高まってきました。そうした時期におひなまつりを開催することで、日田の観光客は増加しました。観光地のオフシーズン対策として、ひな祭りが有効であることが日田で証明されたのです。観光客が来るといふことは、そこで商売が成り立つ、ということでもあるのです。それゆえ、九州のみならず、近年は

全国各地でひな祭りが行われるようになったのです。

おひなまつり継続の秘訣

石丸氏によると、日田（豆田町）のおひなまつりが三十年近く継続できた秘訣は、「町に対する愛着と誇り」ではないか、とのこと。日田はかつての天領であり、当時の町並みが残っていたこと、そしてそれが町の財産であることに地元が気づき、家屋の復元等町並み整備に取り組むようになったことで、さらに町に対する愛着や誇りが強くなったのではないのでしょうか。また、天領時代裕福だった家には当時の高価なおひなさまも数多く残っていました。おひなさまが観光客を呼んでくれる、という事実（第一回目のおひなまつりの成功体験）からも、地元の方、特に観光に携わる人たちは、おひなさまに対する愛着と感謝が高まったかもしれません。そしてもう一つは、「気取らないところ」だと石丸さんはおっしゃっています。観光客向けの飲食店や土産物店は、家にあるおひなさまを店内に飾って観光客に見てもらおう、という方法をとっています。古くなくとも、高価でなくても、各家のおひなさま一つひとつに歴史や物語があり、それが観光客を引きつけるのでしょう。

また、一般的にイベントは実行委員会や行政、観光協会等が主催者となりますが、日田のおひなまつりには第一回目から主催者（組織）はいないのです。各施設・商店が、できる範囲でおひなさまを展示する、という方法なのです。チラシは、隈町での展示が始まった一九八九年以降、日田市が作成していますが、おひなさま展示施設は、おひなまつりのための協賛金を支出する必要はありませんし、日田市や観光協会からの参加要請もありません。実行委員会が予算を組み、集客数や経済効果の目標を掲げるというイベントのやり方もありますが、「お金をかけず、誰もがができる範囲でおひなまつりに参加する」という、肩の力を抜いた方法だからこそ、長く継続できたのかもしれない。

九州各地へのおひなまつりの波及

日田のおひなまつりに刺激を受け、現在では九州各地十カ所以上でひな祭りが行われています。この背景には、一九九〇年代、九州観光誘致促進協議会が九州全県で取り組める誘客テーマとして、また冬期誘客の仕掛けとしてひな祭りに注目したことがあります。九州各地域で実施されていた特色あるひな祭りをルート化し、官民一体となって国内・海外からの観光客誘致とそ

の周遊促進のため、協議会内に「九州のおひなまつり広域振興協議会」を二〇〇〇年に設置しました（注4）。その後、九州観光誘致促進協議会は解散し、新たに二〇〇五年度に九州観光推進機構が設立され、同機構も九州各県の広域連携を目指し、各地のおひな祭りを巡る旅を九州域外の旅行会社に対して提案しています。

日田のおひなまつりの今後

二〇二二年三月、九州新幹線（博多〜鹿児島中央）が開通します。観光客、特に関西方面からの観光客増加に向けて日田市も関西エリアでのPRを強化していく予定です。また、韓国、中国等海外の方もひな祭りに関心はあるようなので、「九州のおひなまつり広域振興協議会」や九州観光推進機構は、インバウンド誘致にも力を入れていく計画です。日田のおひなまつりも、今後はインバウンドが増えていく可能性もあります。

しかし、九州各地でひな祭りが開催されてい



九州各地のひな祭りを紹介する「ひなの国九州」のチラシ（九州のおひなまつり広域振興協議会作成）

ることで、日田での滞在時間や消費単価の減少という課題もあります。日田は、食（日田やきそば、ひたん寿し、日田どん鍋、日田美人畑スイーツ等）や土産品、宿の魅力向上等、消費単価や宿泊客の増加に向けた対策の強化も今後必要となるでしょう。

（あざくら はるみ）

注1…一九七九年に「天領日田を見直す会」に変更（会員百人）。

注2…下町通り（八百メートル）は一九八八〜二〇〇〇年度、上町通り（三百八十五メートル）は二〇〇七〜二〇〇八年度。

注3…おひな雅めぐり散策コースは三月二十一日まで。

注4…現在、この協議会は独立し、メンバー市町村が持ち回りで会長を務める。



連載 I
あの町この町
第 42 回

牧之通り誕生記 —— 新潟県南魚沼市塩沢

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀
(イラストレーター)

いつのころからか、「町並み整備」「町並み再生」といった言い方を耳にするようになった。町づくり、町おこし、町の活性化の一環だが、なかでも「町並み」に目がそがれている。町の中心がシャッター街と化したのをどうにかしようというのとはややちがつていて、むしろその一歩か二歩手前で踏みとどまっている。手遅れにならないうちに活性化を図るにあたり、もつと魅力ある町並みにしよう。中心街が変われば遠のいていた人の足がもどってくる――。

単に町並みを美しくしようというのではない。悔いとも反省ともつかぬ思いをこめての「整備」「再生」であって、もともと美しかった町並みを、われとわが手でダメにした。かつての姿に復元をめざすとともに、今の時代にマッチした現代性を加えていく。ほぼ一九七〇年代にさかのぼる。おりし

も「所得倍増」が高らかに口にされていた。日本経済が戦後最初の高度成長に走りこんだ。収入が倍々ゲームのようにふえていく。着るもの、食べるもの、そして住まいの改善。その際、これまでのものがすべて「古い」という一点で目の敵にされ、三文の価値もないかのように捨てられていった。重厚な木組みの家を引き倒してプレハブに建て替えた。白壁の土蔵をぶっ壊して波板トタンの車庫にした。丹念なつくりの格子窓ではなくてアルミサッシ、木彫看板はお払い箱にしてプラスチック……。歴史のある城下町、趣きのあった宿場町、昔ながらの門前町、いずれもいつせいに化粧直しがほどこされ、安っぽいアーケード街に早変わり。日本全国どこにもある町並みになった。一九七〇年代を境にして、日本の町はいちどに醜くなった。

新潟県南魚沼郡塩沢町で「塩沢雪国歴史街道整備」プランがまとまり、計画書の形をとって、事業として動き出したのは平成十五年（二〇〇三）のことである。当時の人口約二万。江戸と越後を結ぶ三国街道の宿場町として発展した。「塩沢お召し」で知られ、高級織物の産地だった。そして中心街である「中通り」は旧街道以来の歴史と文化をもつエリアだが、市街地の変化や郊外店の進出で、めだつてさびれてきた。このままカンコ鳥の鳴く状態がつづくと、恐れているシャッター街が現実になる。

プランをまとめるまでに、町の人々は何度となく古い写真をながめたにちがいない。父の代、祖父の代の塩沢町。明治・大正・戦前の宿場町。そこには風格のある町並みが落ち着いた通りをつくっている。妻入りの三角屋根が整然と並び、黒い木組みと白

壁がみごとにコントラストを見せている。先祖たちがスタイルとしてねり上げ、歳月が磨きをかけた。なんともシヤレた様式美であつて、いまずぐにも訪ねたくなる。

同じ町並みが、なんと変わつてしまつたことだろう。どの店といわず、トタン張りの軒を突き出し、バカでかい看板をのせ、ペタペタ広告を貼りまわしたガラス戸。母屋の立派な木組みを、どぎついカラー合板で覆つてしまった。どうしてこんなバカげた

ことをしたのか、いまとなつては首をひねるしかないのだが、時代のモードは人間の判断力をマヒさせるものなのだ。

整備計画に「塩沢・雪国・歴史・街道」が掲げてあるのが意味深い。人々が考えを述べあつて知恵をしぼるなかで、この四項にいきつた。自分たちの故里塩沢、雪国という特色、先祖が積みかさねてきた歴史、街道と盛衰をともにしてきた性格。それぞれを現代の目で町並みに生かせば、必ずや町は甦る。



鈴木牧之像

上越線塩

沢駅は木造のガランとした駅舎があるばかり。東へのびる駅前通りに、いかにも旧旅館風の建物が見える。国鉄全盛時代には人の波がたえなかつたと思われ、いまやたまに車が通

り過ぎるだけで人影がない。ゆっくり歩いて五分とかからない。四つ辻に出たとたん、忽然として別世界があらわれる。

広い道路と、ゆったりした歩道。その両側に妻入りや平入りの家並み。黒い木組みと白壁のコントラストがあざやかだ。白と黒だけでは強すぎるのをおもんばかつてか、あいまに淡い黄色の壁。伝統的な日本家屋のスタイルだが、昔どおりというのではないだろう。それが証拠に受ける印象がモダンであつて、あきらかに「今」のセンスで設計された。伝統と現代が巧みに融合させてある。

知られるとおり、古来、日本家屋は夏を旨としてつくられ、冬の寒さが耐え難かつた。また水はげが悪く、個室がほとんど不可能だった。一九七〇年代に全国でいっせいに建て替えが始まつたのは、誰もが旧来の住まいの欠陥を身にしみて感じていたからである。

建築技術が格段に進歩して、伝統的な木組みとみせて、ちゃんと個室に仕切れる。台所や調理場の水はけは完璧。床暖房、壁には断熱材、窓は木枠にサッシをとり入れ、二重ガラスで寒さに対処する。内部にも伝統と現代が暮らしに応じて取り入れてある。家々の軒下に白木の小さな板が見えた。

「まちなみ景観協定合格之証 しおざわ
牧之通り組合」

中通りが「牧之通り」と名を変えた。江戸後期の雪国の雪と暮らしにわたる名著『北越雪譜』の著者鈴木牧之にちなんでいる。著書のなかで、かりに現代語に訳すと、「私の住む魚沼郡は…」私の住む塩沢あたりは…「わが塩沢は下組六十八ヶ村の郷元なので…」と何度も述べているとおり、塩沢町中通りの生まれ。復元された家並みの一角に「鈴木牧之翁生家」（正確には生家跡）の標識が見えるが、生涯をこの通りで過ごしたのだから、その名をあてて当然至極というものだ。

町並み整備がスタートしたのは、ささほど述べたとおり平成十五年であって、それはいわゆる「平成の大合併」と時期がかさなっている。現在の南魚沼市は二期の経過をへて成立した。

平成十六年（二〇〇四）

六日町、大和町合併

平成十七年（二〇〇五）

南魚沼市、塩沢町合併

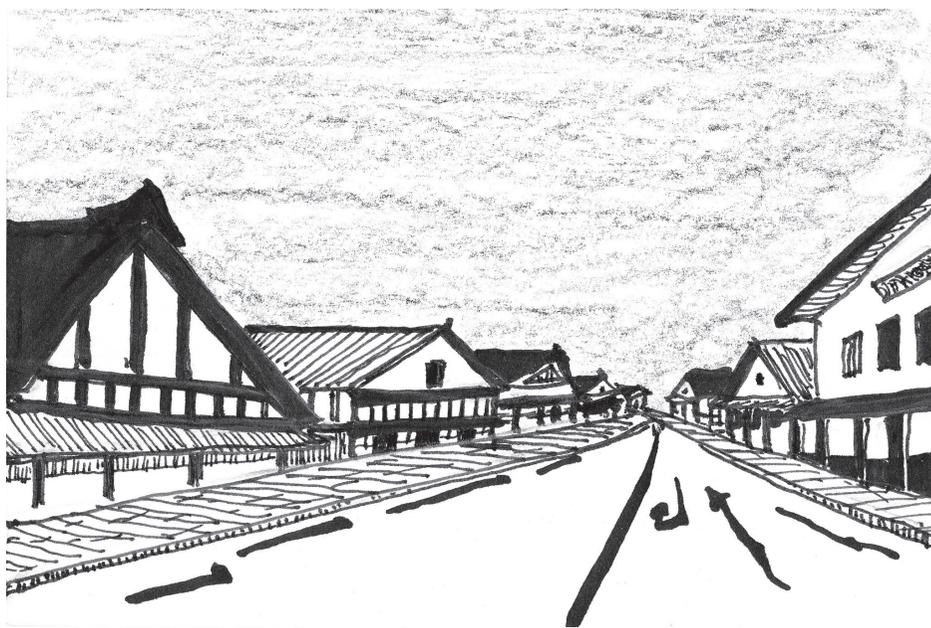
三国街道沿いの南魚沼郡四町を一市とする案にあつて、まず湯沢町が合併を拒んだ。塩沢町の住民投票では合併反対が多数を占めた。町並み整備にとりかかったのは、塩

沢町の人々にとって自立の道をめざす意志表示でもあつたにちがいない。にもかかわらず一年遅れで南魚沼市に加わつたについては、少なからず政治事情がかかわつていただろう。

人々はくじけなかつた。市制、町制とかかわりなく、要は自分たちの町並みをつくることであつたからだ。「まちなみ形成協定運営委員会」をつくり、整備手順をととのえた。商工会とコン

ビを組んで資金計画の相談にのる。個々の建物に厳しい規制をもうけた。高さは十一メートルをこえないこと、原則二階建て（高床式はダメ）、木造、屋根は切り妻か入り母屋、瓦・スレートは黒、柱は自然色か、黒もしくは茶色、窓飾りは格子、門灯は行燈風、塀は板塀。

デザインルールにもとづいて希望を聞き、運営委員会で検討、形や色にわたり修正を



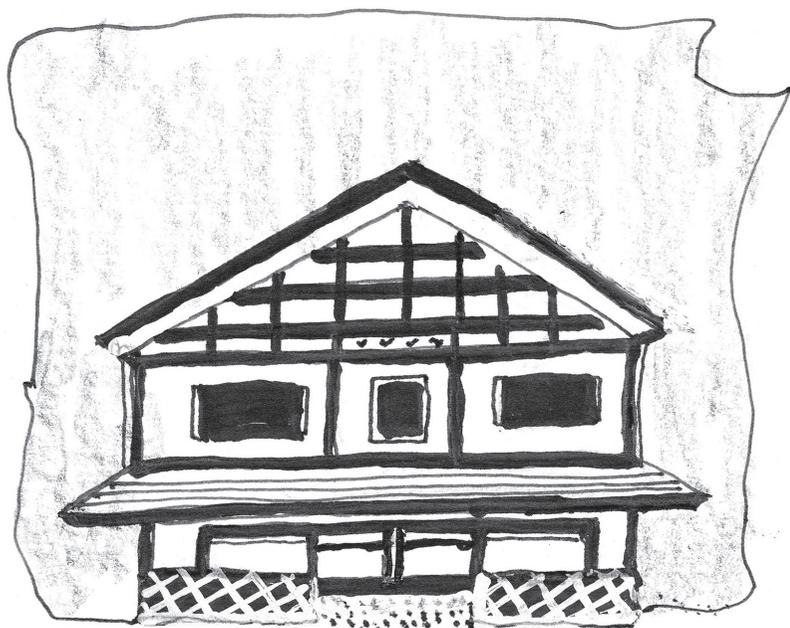
塩沢・牧之通り

受け、そののちようやく「デザイン適合票」が出て合格。

美しい牧之通りの誕生にあたっては、い

くつか好条件にめぐまれていた。旧宿場町の通例で、間口は狭くても奥はウナギの寝床のように長いのだ。店先を削られても支障はない。おかげで道路の拡張と広い歩道が実現した。

たしかに中通りにカンコ鳥が鳴きかけて



牧之通りの商家

木分の二メートルが

いたにせよ、和菓子、金物、酒造り、信用金庫、美容、医院、米、種苗・肥料、本・教科書など、生活の基幹に及ぶ職種が中心で、しかも何代にもわたって信用をつちかっていた。車が社会に応じられるエリアにして、しかもそこが別天地のように快適となれば、当然のことながら顧客はすぐにもどってくる。

廃屋や倉庫だったところを駐車場にした。ただっぴろい空地ではなく、木組みの門があって、殿さまの屋敷に入っていくところもち。通りのまん中あたりには公衆トイレつきのお休み処。雪国の特色を生かして雁木を復活させた。旧来のように連続して陰気なものではなく、家屋の付属物として、少しずつ高低をちがえながらつづいていく。

広い歩道に加え、雁木分の二メートルが

セツトバックで加わり、なんともうれいしプロムナード（遊歩道）があらわれた。

新しい町並みづくりにあたり、委員会ではいろんなサンプルを用意した。「土蔵造り」は古くからの日本家屋の様式の一つで、母屋自体を土蔵のように厚い土壁・漆喰塗で仕上げる。火事に強いことから商家街で好まれた。

牧之通りでは信用金庫が土蔵造りを採用。いかにも信用商売にふさわしい。入口の重苦しさをやわらげるためだろう、入ったところがギャラリーになっていて、金銭の用向きできた人が、ついでに目の保養をしている。

吉野屋、中島屋、扇屋、高木屋、高田屋……。門灯の書き文字に味がある。デザイン化してあって、それが実に奥床しい。たずねてみると、一様に「宮嶋屋のおばあさん」の返事が返ってきた。年配者だがしつかり者で、女子美を出たセンスはいまも若々しい。「宮嶋洋服店」もあるから、腕に覚えのテーラーのつれ合いさんとみえる。

塩沢町が条件にめぐまれていたことの一つだが、中通りから一つ入ったすぐのところは商工会ほか行政のセンターで、広場をもち、鈴木牧之記念館もある。イベントや行事と商店街のそぞろ歩きを連結できる。郊

外店がどれほどビルの大きさを誇っても、
青空と広場つきの空間にはかなわない。

条件だけなら、たいていの町々にもけつ
こうそなわつていゝものだ。二十一世紀の新
しいプロムナード街を生み出したのは、商
工会と住人双方に人がいたからである。リー
ダーとして説得できて、仲間を引っぱつて
いける人。またわきにはサブをつとめ、個
性の強いリーダーをやわらかく補佐する人
もいたはずだ。

商工会の人の口から、チラッと「中島屋
のお婆さん」が洩れたので、用あげに中
島屋の玄関に立つと、にこやかに女主人の
出迎えを受けた。冬は雪譜まつり、春は雛
人形まつり、初夏になると五月人形のお目
見え——。旧宿場町の家々の蔵には、お宝
がどつさり眠っている。死蔵していてもつま
らない。牧之通りを暮らしの場であるとも
にハレの日の舞台にした。歩行者天国で
はコンサートや踊り、青空ギャラリーもで
きる。

言い忘れていたが、塩沢中通りは、さら
にもう一つ条件にめぐまれていた。地図に
見るとおり、現在は旧三国街道に寄りそつ
て国道17号、さらに関越自動車道が走つて
いる。国道沿いに巨大スーパーや超大型百
円ショップが林立してゴツソリ客を取られ

たが、お返しにトラックその
他の大型車は一手に引き受け
てもらえる。新しい町並みが
産ぶ声を上げ、口コミでひろ
がるにつれて、家族づれの車
が旧道から牧之通りにやつて
くる。

「——となると、やはり食
べ物屋とか、シヤレたカフェ
が欲しいなア」

なにげなく言うと、中島屋
のお婆さんは待つてましたと
ばかりうなずいた。ちょうど
その件で話がすすんでいる。
お休み処のとなりあたりで、
長屋式に奥へ店がつらなり、
お土産ショップ、手うちそば、
軽食喫茶……。こちらは屋号
もちの亭主の息子たちの担当
とか。若い家族づれをたのし
ませるには、センスの合う世
代にバトンタッチして「宮嶋
屋のお婆あさん」「中島屋の
お婆さん」クラスは後見役が
よるしい。身を引いて役割りをゆずり渡す
のもまたリーダーの大切な役割りなのだ。

町並みづくりは資金や補助金以外にも、

Promenade



気骨の折れることが多々あったにちがいな
い。一つ二つ円満解決に導くには、やはり大
黒柱のような役まわりの人が必要だ。その

点、男よりも女が望ましい。男は社会性や世間の義理の名のもとに時と場でたやすく妥協するが、女性は原則をゆずらない。理想の町並みをつくりたいなら、例外をもうけてはならないことも知っている。

「こうなると、電柱がジヤマっけですな」

プロムナードに気をとられていて、おデコをぶつけそうになった。中島屋のおばさんはまたもニッコリうなずいた。とっくに申請済み。電線が地下に移されスッキリした町の姿を、自分もまた一日も早く見たいもの――。

昨秋（二〇一〇年秋）、久しぶりに塩沢を訪ねたところ、電信柱はそっくり地上から消えていた。妻入りの三角が整然と並ぶところは古写真の洗い出しをしたかのようだった。よく見ると屋根に三角の飾りものがのつている。「風返し」といって古くからつたわる魚沼地方に特有のデコレーション。駐車場の入口の雁木は祭礼の提灯門のように高い。内科医院は、赤ひげ先生に似合いのつくりで、ドアをたたくと「ドール」と奥から声が聞こえる気がする。

菓子店の垂れ幕に「越後名物 元祖 はっか糖」と染めつけてある。はっかの葉を蒸留したのが薄荷油で、清涼芳香剤、また健胃や頭痛に用いられてきた。皮膚を刺激し

て脚の疲れなどもやわらげてくれる。薄荷油を固形にしたのが薄荷脳。独特の香味を加えて砂糖菓子にしたのが「はっか糖」。

若い世代は、はっかといってもピンとこないだろうが、メントール、あるいはメントなら親しいだろう。ハッカ属の植物「セイヨウハッカ」はペパーミントのこと。

越後から江戸へ向かうには、谷川連峯をこえなくてはならず、三国峠が最大の難所だった。旅人は前夜は塩沢宿に泊って入念に旅支度をした。薄荷は疲労回復に欠かせない。現在でいうスタミナドリンクである。店の奥におごそかな免許證が額入りで掲げられていた。

薄荷腦

薄荷油

新潟縣平氏 青木重平治

製造免許許可事

明治二十年六月 内務大臣・伯爵

山縣有朋

明治政府が薬事法を制定したにつき、それまで自由につくっていたのが許可制になったと見える。「平氏」は士族、平民の区別を言いたっていたころの名ごりだろう。百二十年あまり前の当主重平治は「北越寒製 薄荷園」の名で売り出した。わきに「万病に効く」といった意味のキャッチフレーズ

がついている。昔の人は何ごとにもスケールが大きかったようで、広告用の看板が大人の背丈ほどあって、堂々と「万病」をうたうところが豪儀である。ちなみに現当主は十二代目というから、「元祖」を名乗る十分な資格がある。

当今の「はっか糖」はタバコのようなケースに入っていて、タバコのように細長くて、雪のように白い。サクツとかむと、えもいえぬ清涼感が口中にひろがっていく。全国に数ある和菓子のなかでも、とりわけ優雅でエスプリのある菓子ではなからうか。

淡い甘みを味わいながらお休み処近くにやってくる、小店のあいだへ人がつぎつぎに入っていく。息子たちがアイディアをかためて実現した食べもの・お土産小路で、ギャラリー風、ショップ風とりませ、なるほど、若い世代のセンスである。入口でキリリと和服を着こなした女性が何やら配っている。旧世代のおかたがチラシ係とはといぶかしみながら近づくと、酒造りの蔵元の女将さん。たしか中島屋のおばさんの絶妙な補佐役と聞いている。若い世代の店開きに、チラシ係を買って出たと見える。笑顔が娘のように初々しく、気のせいかわのかにペパーミントのかおりがした。

(いけうち おさむ)



連載Ⅱ
ホスピタリティーの
手触り63

ラグジュアリーであれ、ニッポン

旅行作家 山口 由美

高品質な商品と

ホスピタリティーで勝負すべき

一月中旬、東京でプロッサム・ジャパンという催しがあった。日本で初めて開催されたラグジュアリーマーケット向けの旅行商談会である。

ラグジュアリー、辞書的に翻訳すれば「贅沢、豪華」。リーマンショック以降、ことさらに景気低迷、デフレの話題ばかり語られる日本だが、世界に目を転じれば、旅行業界のいわゆるラグジュアリーマーケットは大きく動いている。今回のプロッサム・ジャパンも、それを象徴するものだった。

ただ、考えさせられたのは、声を上げたのが日本人ではなく、インバウンド、アウトバウンド、双方における日本のラグジュアリーマーケットの潜在的な可能性に目を着

けた、心あるガイジンであった点だ。

発起人のジェイ・マーテンス氏は、ラグジュアリートラベルの市場開拓に関わる先駆者として、数々の展示会を成功させてきた人物である。でも、近代日本の幕開けだって「黒船」だったのだから、きっかけなんか、どうでもいいのかもしれない。

世界のマーケットで、日本はどう生き残っていくのか。

それは、ホスピタリティー産業のみならず、あらゆる産業において、日本に突きつけられている課題である。そして、見識者が示す回答は、大抵同じ方向を向いている。

それは、大量生産される商品の価格競争で戦うのではなく、日本が培ってきた高度な技術力・ノウハウを背景にした高品質の商品で勝負するべき、という考えである。農産物においても、電気製品においても、

工業技術においても、等しく言われている。すなわち、高くても欲しい「ニッポン」ブランドを確立させるべきである。

ならば、同じ答えは、ホスピタリティー産業にも当てはまるはずだ。

繊細な「おもてなし」の文化、清潔できちようめんな国民性、南北に細長い多彩な風景を持つ国土、世界から注目される日本料理。そして、忘れてならないのは、ジェイ氏が、日本をアウトバウンドの重要なマーケットとしても位置づけている点だ。少なくともアジアでは最初にラグジュアリートラベルに親しんだ民族。海外に出始めたころは、慣れないこともあったが、今や「ホテルの雰囲気維持するために」日本人客が欲しいと、ラグジュアリーホテルに言わせる存在なのだ。その自国民を満足させてきたホスピタリティーは、世界に誇って



ブロッサム・ジャパンのオープニングセレモニー

いはずである。
日本には、ラグジュアリーマーケットにある。ただ足りないのは、世界の動きをよく知り、自らを俯瞰して位置づけられるグローバルな視点と、世界に向けた情報発信の少なさではないのか。

会場を歩きながら、私は遠い昔の、ある出来事を思い出していた。

一九七〇年代か八〇年代ころ、戦前から外国人客や政財界の顧客が少なくなり始めていた箱根宮ノ下の富士屋ホテルが、ステンドグラスが自慢の宴会場「カスケードルーム」に畳を敷いて、団体客を受け入れたというエピソードである。

もちろん、それは一時的なこととで、「カスケードルーム」は今も、昔ながらのスタイルを保っている。しかし、古き良き時代を知る従業員は、その時、言いようのない寂寥感に涙したのだった。

エピソードが物語るのは、一九七〇年代以降、ホテル業界に、大衆化という変革の波があった事実である。戦前から一九六〇年代ころまで、世界のラグジュアリーホテルは、旧時代のエスタブリッシュメントによる安定したマーケットを維持していた。二度にわたる世界大戦はあったけれど、それでもホテルの本質は変わらなかった。それを大きく揺さぶったのが、

当時の経済システムやライフスタイルの變化だったのではないかと。

一九五八年、経営者の娘であった私の母との結婚により富士屋ホテルに入社した父は、同族経営が終わった後も、変革の波の中で生きてきた。畳を敷いたエピソードを父から聞いたかどうかは忘れたが、いつも口癖は「昔とは時代が違う」だった。

しかし、時代は再び巡って、かつて失ったマーケットであったはずの、外国からの富裕層、すなわちインバウンドのラグジュアリーマーケットが、注目されている。そのことに感慨を覚えたのだ。

長年の価格競争と内向き思考の中で、視界が曇っているだけで、しかるべき知恵と投資があれば生き返るラグジュアリーマーケットの素材が、日本には、まだまだある。もちろん、新興国の経済発展などを背景とした現代のラグジュアリートラベラーは、かつての富裕層と同じではないだろう。しかし、高品質なホスピタリティーに対して対価を惜しまない姿勢は、同じであるはずだ。

すべてが、ラグジュアリーマーケットを目指す必要はない。しかし、いつか行きたいと憧れる「ニッポン」なのに安いのと、ただ安いのでは意味が違うのである。

(やまぐち ゆみ)

旅の図書館 新着図書紹介

日本航空の最後のジャンボ機が、三月一日で運航を終えた。

一九七〇年代から日本の空をはじめ世界の空を席卷したボーイング747型機。「ジャンボ」の愛称で親しまれた超大型旅客機は、空にも大量輸送時代の到来をもたらし、日本人の海外旅行を大衆化させる上でも極めて大きな役割を果たしてきた。航空・旅行業界にとっては、また「昭和」の記憶が歴史の彼方へと姿を消したわけだ。

『昭和旅行誌』雑誌「旅を読む」(森正人著、中央公論新社)は、その「昭和」という時代を、雑誌「旅」を通じて読み解こうと試みる。

一九二四年(大正十三年)に創刊され、戦時中の一時的休刊を除けば、版元がJTBから新潮社に変わるまで七十九年にもわたって毎月発行されてきた『旅』は、著者が指摘するように「日本で最も長く続いた旅行雑誌」であることは間違いない。人間で言えば喜寿を超える歳月を生きてきた『旅』は、創刊当初から、旅行を通して日本人を啓蒙するという目的を掲げ、旅行を日本に普及するという役割を果たした。

戦後、旅行が大衆化していくなかで、旅行者の心構えだけでなく、若者の旅行、女性の旅行、新婚旅行、一人旅など、さまざまな旅行のスタイルを提案し、国内の観光地や海外の国々など、旅行で

見るべきものも紹介してきた。同時に、投稿欄も設けて読者を巻き込んでいく誌面は、『旅』が日本人の旅行を作り上げるメディアだったことも示している。

だからこそ、著者は、『旅』に注目することで、「日本人がこれまでどのような旅行をしていたのかを理解することができるのではないだろうか」と思い立ったのだ。

しかし、その『旅』も二〇〇四年一月号でいったん休刊し、版元をJTBから新潮社に移して、二〇〇四年五月から再スタートすることになる。

著者は、旅行業界全体としても、ツアーや宿泊施設、切符などの販売窓口として機能してきた旅行会社が、個人の手で旅行の手配をすることができるインターネットによって大きな影響を受けている事実に着目し、旅行会社が版元だった『旅』もまた、旅行情報の提供という役割をインターネットに奪われた面が否定できないと見る。

編集者が毎月、特集のテーマを設定して原稿を集め、一定のフォーマットで情報を提供するという雑誌の作り方に対して、インターネットの場合、ホームページ上に、特定の包括的なテーマが設定されるのではなく多数のカテゴリーが用意され、それぞれに応じた情報が詰め込まれている。著者は、旅行の指導的な役割を長く担ってきた

『旅』が「旅行のテーマを設定し、情報を選別し、序列化してきた」時代から、旅行者が雑誌を経由することなく、旅行産業と直接関係を持つことができる時代へと変遷し、『旅』が果たしてきた役割も相対的に低下したのではないかと分析する。

そして、発刊直後から投稿欄を設けて読者の個人的な考えや感想を掲載してきた『旅』の役割も、インターネットなどによる「口コミ」に奪われてきたのだ。

「今、旅行メディアで起こっているのは、本来は付随的であったはずのこの読者投稿欄が、本編であるはずの記事よりも人々の旅行に大きな力を持つてきている」と指摘する著者は、「このような今日の旅行メディアの質的变化を考えれば、JTBによる『旅』の休刊は必然的だったと言えることができるかもしれない」と喝破し、その『旅』の休刊もまた、「昭和の観光の終わりを告げるものだった」と結んでいる。(挑圭)



四六判 292 ページ
定価 2,200 円
中央公論新社

■旅行者動向別冊

旅行者の行動と意識の変化 1999～2008

旅行者の動きを全国規模の独自アンケートからまとめ毎年発行している『旅行者動向』をもとに、十年間の変化を改めて分析・整理したものの。十年間を通して見ること、旅行マーケットの中長期的なトレンドが浮き彫りに。二〇一〇年三月発行。

■旅行者動向2010 最新刊

国内・海外旅行者の意識と行動について毎年実施している当財団独自調査の分析結果をビジュアルに解説。二〇一〇年十月発行。

■旅行年報2010 最新刊

直近一年間の旅行・観光市場にまつわるあらゆる出来事について、数多くのデータ・資料をもとに分析。日本人の国内・海外旅行、外国人の訪日旅行、観光産業、国内観光地、観光政策など、さまざまな角度から旅行・観光市場の現状を一望できる一冊。二〇一〇年九月発行。

■「時代の価値から考える 若者の海外旅行離れ」巻末…ガールズマーケット旅行意識調査

「若者の海外旅行離れ」を今までにない視点から取り上げた当財団主催「海外旅行動向シンポジウム」採録集。「旅行離れ」の原因を、雇用や収入といった社会・経済的な側面にとらわれず、若者の価値観や行動を深く知る。そこから実践的な解決策を探る。また、本シンポジウムに合わせて「読者モデル」へのグループインタビュー調査や、F1層女性へのウェブアンケート調査も実施独自の研究成果と「ガールズマーケット旅行意識調査」結果も収録。二〇一〇年十月発行。

※当財団出版物のご注文はホームページからお願いします。担当…財団法人日本交通公社観光文化事業部

電話 03・5208・4704 <http://www.jtbr.co.jp>



次号予告

●地域の魅力を高め、地域振興につなげていく狙いからオーブンガーデン活動が広がっています。オーブンガーデンの魅力や「花と緑のまちづくり」をテーマにした各地の活動を紹介します。

調査研究だより

●東京から定期船「おがさわら丸」に揺られること二十五・五時間、南に約一千キロの距離に小笠原は位置しています。

●小笠原では、その特徴ある豊かな自然環境の保全と観光振興の両立を目指す「エコツーリズム」を基軸とした地域づくりが進められてきていますが、環境省では二〇〇四年度(平成十六年度)より小笠原におけるエコツーリズム推進の自主的な取り組みを支援する事業を毎年実施しており、一貫して当財団がそのお手伝いをしています。

●二〇一〇年度(平成二十二年)度事業では、屋久島・白神山地、知床に続く国内四番目の世界自然遺産としての登録を目指している小笠原において、登録後の地域のエコツーリズムの取り組みに大きな影響を与えるため、観光客数の増減や客層の変化を見通す材料とするため、現在小笠原を訪れている観光客や島内のガイド事業者、船舶会社や旅行会社といったさまざまな主体の動向を把握する調査を行っています。

●小笠原の世界自然遺産登録についてはこの夏にもその可否が決定しますが、当財団では今後も継続して小笠原の地域づくりの取り組みをさまざまな側面からお手伝いし、またそこから得られた知見を他の調査事業にも広く活用することにより、わが国の観光振興に貢献していきたいと考えています。

(菅野)

編集後記

◆私たちの暮らしに一番身近な交通機関として自転車がツーリズムの世界、市民社会の中で近年注目を集めています。自転車は誠に重宝な乗り物です。エネルギー問題の解決に貢献し、環境にやさしく健康増進につながります。市民の足として旅行者の交通手段として自転車の活用を促されるよう自転車によるまちづくり、地域振興が全国各地で積極的に推進されています。今号ではその代表として「宇都宮市」と「しまなみ海道」に登場して頂きました。様々な自転車の楽しみ方、地域住民との交流、まちの活性化の様子などが紹介されました。駐輪場や自転車専用道の整備など今後本格的に自転車ツーリズムを振興する上で大きな課題が残されていますが、地域の振興に自転車が欠かせない存在であることの認識が深まって来ました。シニア世代にはありがたい電動アシスト自転車の普及も進んでいます。生活者重視の社会を築くために車や歩行者とともに共存出来る安心・安全で快適な自転車社会の実現が望まれます。

◆今号をもって退職させて頂くことになりました。読者の皆様、関係者の方々のご協力、叱咤激励を賜り156号以来9年間にわたって本誌の編集を担当させて頂きました。厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

(宇八)



観光文化 第206号

第35巻2号通巻第206号

発行日 2011年3月20日

●
発行所：財団法人 日本交通公社
東京都千代田区丸の内 1-8-2
第一鉄鋼ビル
〒100-0005 ☎ 03-5208-4701
<http://www.jtb.or.jp>

編集室：東京都千代田区丸の内 1-8-2
第二鉄鋼ビル 旅の図書館内
〒100-0005 ☎ 03-3214-6051
<http://www.jtb.or.jp/library/>

編集人：外川宇八
発行人：新倉武一

●
印刷所：JTB印刷株式会社

禁無断転載

ISSN 0385-5554